

教科書について

「楽しく学べて、コミュニケーション力が付く教科書」を求めて

考えてみませんか？

皆さんはこれまで、どんな教科書に出会い、どんな「付き合い方」をされてきましたか？
長年、既存の教科書について疑問を持ちながら、考え、試行錯誤を重ねた現場の教師たちから『できる日本語』という新しい教科書が生まれました。その壮大な作業の過程で教師が学んだこと、考えたことを、皆さんと共有していきたいと思います。

第

1

回

教科書を考えるって、面白い！

楽しい授業の3点セット

なぜ日本語の教科書について考える必要があるのでしょうか？ それは、教科書は、学習者が「楽しい！」と思える授業を進めていくための、重要な“道具”だからなのです。学習者が「ああ、今日の授業は楽しかった、よかった！」と思えるための3点セットとして、〈学習者のモチベーション〉〈教師の創意工夫〉〈適切な教科書〉を挙げることができます。どんなに教師の周到な準備、見事な授業展開があったとしても、学習者自身に「学びたい」という思いが起こらなければ、「日本語学習」は生まれてきません。「馬を水辺に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない」という諺ことわざがありますが、最も大切なのは、学習者のやる気です。さらに、それに応えるべき教師の熱意と、学習者に合った教科書が必要になってくるのです。

こんな声も出てくるかもしれません。「教科書を大切にするのは、ちょっと古い考え方ですよ。『教科書を教える』から『教科書で教える』へ、さらに『教科

書は教えない』と、日本語教育の流れは変わってきているのですから……」

こういった考え方にも一理ありますが、もし共通の教科書がない状態で日本語の授業を実施するとなると、次のような問題が出てきます。1. 教師が毎回、クラスや学習者に合わせた独自の教材を作成しなければならなくなる、2. 学習者にとって一貫性のある、包括的な学習が難しくなる、3. チームティーチング(何人かで一つのクラスを受け持つ授業スタイル)における、引き継ぎや内容調整などが煩雑になる、などです。

そこで、既存の教科書を有効に活用する方法をお伝えしようと考えました。

教科書を選ぶ力・使う力を養おう！

私が専業主婦から日本語教師の道に入って、四半世紀が過ぎました。異なる価値観・文化を持つ学習者との出会い、さまざまな「対話」を通して、授業は進んでいきます。

そんな日本語教師人生は、毎日、新しい発見があり、わくわくするような冒険の連続です。自分が当たり前のこととし

て捉えている、日本語・日本社会・文化や習慣についての鋭い質問が、学習者から飛んできます。そこから「なぜだろう？」と、さまざまなことを問う態度が養われ、さらに、他者との多様な対話が生まれます。こうして、日本語教師の毎日は、さらに楽しく充実したものになっていきます。しかし、駆け出しの頃には、教科書そのものを「なぜだろう？」と問う視点が欠落していました。

イーストウエスト日本語学校に勤務して20年になりますが、以前は、非常勤講師として何冊もの教科書をカバンに詰め込み、アチコチ飛び回る毎日でした。留学生対象のクラス授業、ビジネスマンやその家族を対象にしたいくつものプライベートレッスン……。そんな私は、それぞれの教科書の特徴・内容を把握し、どう教えていくかを考えるのに精いっぱい。とても「教科書分析」などという余裕はありませんでした。また、「教科書には正しいことが書かれている」という教科書至上主義も影響していました。

しかし、私は次第に教科書そのものに疑問を抱きはじめました。「語彙・文型の制限があるとはいえ、なぜこんなに不自然な会話を載せるのだろう」「こんな文型を学習者がいつ使うのだろう」「教科書をひたすら学習しても、話せるようにならないのは、なぜだろう」

一方で、「どんな教科書でも教師の使い次第」ともいえます。その教科書を十分に咀嚼し、特徴を生かしながら、「その人にしかできない味付け・香り付け」をしていくことで、楽しい授業が生まれてきます。問題は、それをただ無批判に使うことにあるのです。

とはいうものの、自分が追い求める日本語教育に合った教科書との出会いで、どんなに毎日の授業がやりやすくなるか、しれません。まずは適切な教科書を見つ

ける力を養い、その教科書をどう生かしていくかについて考えるのが、この連載の目的です。「学習者が楽しく学べて、本当に使えるようになる教科書」を、自分の目で探し出し、使えるようになりましょう。

文型は間違えていけないけれど……

学

習者：これ、お土産です。先生も食べたいですか。

教師A：おいしそうね！ どれにしようかなあ。このチーズ味、取ってもいい？

学習者：はい。先生、取ってもいいですよ。

違和感を覚えたAさんは、教員室で、同僚と一緒に話し合いました。教科書に沿って忠実に文型を教えようとしていたAさんは、場面・状況設定の大切さに思いが至っていませんでした。これは、「文型積み上げ式教科書」を、教師が深く考えずに使っていることから来ていたのです。

教科書は、教師の工夫次第です。教師の、場面・状況への配慮が十分でないため、「適切さ」に欠けた日本語使用者をつくり出してしまっている例は少なくありません。

こんな教員室での教科書談義が、『できる日本語』の誕生につながっていきました。



嶋田和子

イーストウエスト日本語学校副校長。外資系銀行勤務の後、専業主婦を経て日本語教師。現在は、日本語教育業界を牽引するベテランの一人として学習者への日本語教育はもちろん、教師養成にも当たる。『目指せ、日本語教師力アップ！——OPIでいきいき授業』（ひつじ書房）など、著書多数。『できる日本語』（アルク）監修

連載ラインナップ

- 第2回 どんな教科書と付き合っていますか？
- 第3回 タスク先行型授業にチャレンジ！
- 第4回 「わかる」から「できる」へ
- 第5回 漢字学習も「できること」重視！
- 第6回 「プロフィেশンシー」で、教師力アップ！ 1
- 第7回 「プロフィেশンシー」で、教師力アップ！ 2
- 第8回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 1
- 第9回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 2
- 第10回 自律的な学びを支えるモノ
- 第11回 「学習者が話したくなる」教科書とは？
- 第12回 対話で新たな日本語教師人生を！